

第11回夏期福音特別集会(2)(清里)

主人と家来

―マタイ伝第18章21～35節―

1964年7月17日

小池辰雄

天国をものにする 極限的な真理 償いかたなし 自我という罪 羊の我 キリストにおける
熱心 無人無私 空気は無条件 十字架の赦し 共に十字架されたり もし人を赦さなかった
なら 聖霊のバプテスマ 赦しと審判 担いの赦しの愛

【マタイ18】

21ここにペテロ御許に來りて言う『主よ、わが兄弟われに対して罪を犯さば幾たび赦すべきか、七度までか』22イエス言いたもう『否われ「七度まで」とは言わず「七度を七十倍するまで」と言うなり。23この故に天国はその家来どもと計算をなさんとする王のごとし。24計算を始めしとき一万タラントの負債ある家来つれ來られしが、25償い方なかりしかば、その主人、この者と、その妻子と凡ての所有とを売りて償うことを命じたるに、26その家来ひれ伏し、拜して言う「寛くし給え、さらば悉とく償わん」27その家来の主人、あわれみて之を解き、その負債を免したり。28然るにその家来いでて、己より百デナリを負いたる一人の同僚にあり、之をとらえ、喉を締めて言う「負債を償え」29その同僚ひれ伏し、願いて「寛くし給え、さらば償わん」と言えど、30肯わずして往き、その負債を償うまで之を獄に入れたり。31同僚ども有りし事を見て甚く悲しみ、往きて有りし凡ての事をその主人に告ぐ。32ここに主人かれを呼び出して言う「悪しき家来よ、なんじ願ひしによりて、かの負債をことごとく免せり。33わが汝を憫みしごとく汝もまた同僚を憫むべきにあらざるや」34斯くその主人、怒りて、負債をことごとく償うまで彼を獄卒に付せり。35もし汝等おのおの心より兄弟を赦さずば、我が天の父もまたなんじらに斯のごとく為し給うべし』

●天国をものにする

キリストがガリラヤで伝道されたあとで、近隣の異邦に巡回の伝道に出かけられました。それから、ガリラヤにまた帰られて、少し伝道された。その最後のあたりに出てくるところのお話であります。これがマタイ伝の18章に出てくる。ちよつと、私たち現代人には、



例話としてはあまり身近でないようなお話です。

21 ここにペテロ御許に來りて言う『主よ、わが兄弟われに対して罪を犯さば幾たび赦すべきか、七度までか』²² イエス言いたもう『否われ「七度まで」とは言わず「七度を七十倍するまで」と言うなり。』

ということペテロに語られたあとで、「この故に」と言われた。

²³ この故に天国はその家来どもと計算をなさんとする王のごとし。

ここにもまた、「天国は」と書いてある。この清里における集会の主題は「天国」であります。キリストは

「天国は、天国は」

と言われた。思われた天国ではなくて、今現に我々が身近に受けとるところの天国を言う昨日も申し上げました。ダンテは、地獄・煉獄・天国を、あの有名な『神曲』において描きましたが、人間にとつては、地獄も現実だし、煉獄も現実だし、天国も現実なんです。この地獄と煉獄と天国は、地獄ばかりの人もなければ、煉獄ばかりの人もなければ、天国ばかりの人もない。この三つのものが錯綜しております。

詩篇第 23 篇に、

「エホバはわが牧者なり、われ乏しきことあらじ。2 エホバは我をみどりの野にふさせ、いこいの水濱^{みぎわ}にともないたもう。3 エホバはわが靈魂^{たましひ}をいかし、名のゆえをもて我をただしき路にみちびき給う。4 たといわれ死のかげの谷をあゆむとも禍害^{わざわい}をおそれじ。なんじ我とともに在^{いま}せばなり。なんじの答^{こたへ}なんじの杖われを慰む。5 なんじわが仇^{あた}のまえに我がために筵^{えん}をもうけ、わが首^{くび}にあぶらをそそぎたもう。わが酒杯^{さかずき}はあふるるなり。6 わが世にあらん限りはかならず恩恵^{めぐみ}と憐憫^{あわれみ}とわれにそいきたらん。我はとこしえにエホバの宮にすまん。」

とある。

「我をみどりの野にふさせ、いこいの水濱^{みぎわ}にともないたもう」

と。非常に天国的な現実かと思うと、

「名のゆえをもて我をただしき路^{みち}にみちびき給う」

と。間違いやすい私たちを聖名のゆえに正しき路^{みち}に導く。これは煉獄的な状態であり、また、

「死のかげの谷をあゆむとも」

というのは、地獄の現実である。

「敵前^{かきまへ}においてわが首^{くび}にあぶらをそそぎ、酒杯^{さかずき}を溢れさせたもう」

煉獄的な現実における、天国的な味わいである。詩篇 23 篇が「人生の歌」と言われますが、そのように、この地獄と煉獄と天国があつた 23 篇の中にもちゃんと現れている。

「人生は涙の谷である」



という。いろいろな問題が次から次へと、一難去つてまた一難来たるといふようなわけです。天気かと思えば、霧がかかったり、雨になつたり、晴れたり。天候と同じわけです。けれども、

「雲の彼方には、太陽は常に照っている」

という。いや実に、太陽の光は雲を貫いて来ている。この雲や霧を貫いて来ている光を受ける世界が天国です。現実のいかんにかかわらず、どんなに暗黒に見えても、そこに光明が来ている。ただ思っているのではない。雲の彼方に太陽があると思つていふのではなくて、現にいつも貫いて来ている。思つていふ、信仰はたくさんあります。

「神さまはある。キリストは生きたもう」

と思つている。思つていたつてダメです、悪くはないけれども。

貫いて浸透している世界、これが天国です。この天国を受けとらなければ、ものにしなければ、現実にしなければ、福音なんていうものは、いくら

「キリスト教」

なんてやったつて、それはご苦労さんな話ですよ。

「天国は」

と言つても、ただ譬えを言つていふわけではない。キリストは譬話を言つたが——「譬話」なんていうから、何か譬えかとかばかり思つては困る——譬話をもつて言つていふキリストの最も凄いい現実なんです。

「天国はこのようなもので、お前たちはそれをものにしろ」といふことです。

● 極限的な真理

23 この故に天国はその家来どもと計算をなさんとする王のごとし。

と、妙なことをキリストは言いだした。

24 計算を始めしとき一万タラントの負債ある家来つれ来られしが、

いろいろな家来があるが、一番これはひどい家来ですね。この「家来」という字は実は「僕隷」という字なんです。「一萬タラント」というのは、昔の計算でいいますと、一デナリが昔の三五銭くらいだそうですから、今でいうと三五〇円とすると、一タラントが六千デナリですから、一萬タラントは二百十億円です。二百十億円の借金をもつていふ家来、これはどうにも償い方がない。

25 償い方なかりしかば、その主人、この者と、その妻子と凡ての所有とを売

りて償うことを命じたるに、

「その王」と言わないで、「その主人」と言い換えてあります。

「この者と、その妻子と凡ての所有とを売りて」



とは、自分を身売りするわけです。昔は妻子というものも、ある意味において物件的に考えられたとみえまして、これを売る。キリストはそういうことを一向お構いなしに、譬話の中にもつてくる。

26 その家来ひれ伏し、拜して言う「寛くし給え、さらば悉とく償わん」
「悉く償わん」と言ったって、それは空約束みたいなもんですよ、とてもそれは償えやしない。けれども、

「とにかく赦してください、しばらくご猶予ください」というわけです。

27 その家来の主人、あわれみて之を解き、その負債を免したり。

二百十億円の負債をゆるして、売ることもみんな免除して、棒引きにしてみましたというわけです。

28 然るに其の家来いでて、己より百デナリを負いたる一人の同僚にあい、

「百デナリ」ですから、三万五千円です。二百十億円と比べると六十万分の一です。六十万分の一の借金をしている同僚に会って、

之をとらえ、喉を締めて

イエスもずいぶん凄いことを仰る。喉を締めてしまう。喉を締めると苦しいわけです。

言う「負債を償え」29 その同僚ひれ伏し、願いて「寛くし給え、さらば償わん」

と言えど、30 肯わずして往き、その負債を償うまで之を獄に入れたり。31 同

僚ども有りし事を見て甚く悲しみ、往きて有りし凡ての事をその主人に告ぐ。

32 ここに主人かれを呼び出して言う「悪しき家来よ、なんじ願いしによりて、

かの負債をことごとく免せり。33 わが汝を憫みしごとく汝もまた同僚を憫む

べきにあらずや」

これも、

「憫むべきにあらずや」

のこの「べき」は強い言葉が使つてある。

「どうしてもそうすべきではないか」と。

34 斯くその主人、怒りて、負債をことごとく償うまで彼を獄卒に付せり。35 も

し汝等おのおの心より兄弟を赦さずば、我が天の父もまたなんじらに斯のご

とく為し給うべし』

今度は、その主人は怒つてしまつて、逆に彼を獄卒に渡してしまつた。こういうお話です。

ずいぶん、極端な数字を並べ、だいぶ極端なことをキリストは仰ると思えます。どうも、このキリストの言葉が激しい。譬話もなかなかどうして激しい。キリストの音信はすべて極限的であります。限界に極まる。キリストはまことに極限をなさる。キリストの言葉が極限的であるということは、キリストの真理がまた極限的、な真理であるということなのです。



常識でちよつと判断できないような、常識を少しはずれたことを仰る。譬話をそれぞれ見てごらん下さい。みんな極限的な性格をもっているから。譬話に限らず、キリストの言葉はみんなそうです。福音というものは超常識の世界です。非常識ではないですよ。常識なんていうのではない。超常識。常識を超えた、そういう極限的なものである。これを見ても、何か少し、私たちの普通の悟性や理性の世界の判断に何か逆らうような、引つ掛かるような激しいものをもっている。けれども、そこに福音の素晴らしきがあるわけです。

● 償いかたなし

「償いかたなし」

というこの言葉が思い出させるのは、ルカ伝の 7 章です。36 節以下に、

「36 ここに或るパリサイ人ともに食せん事をイエスに請いたれば、パリサイ人の家に入りて席につき給う。37 視よ、この町に罪ある一人の女あり。イエスのパリサイ人の家にて食事の席にい給うを知り、香油の入りたる石膏の壺を持ちきたり、38 泣きつつ御足近く後にたち、涙にて御足をうるおし、頭の髪にて之を拭い、また御足に接吻して香油を抹れり。39 イエスを招きたるパリサイ人これを見て、心のうちに言う『この人もし預言者ならば触る者の誰、如何なる女なるかを知らん、彼は罪人なるに』」

あいかわらず、パリサイ的な角度から見ているわけです。

40 イエス答えて言い給う『シモン、我なんじに言うことあり』シモンいう『師よ言いたまえ』41 『或る債主に二人の負債者ありて、一人はデナリ五百、一人は五十の負債せしに、42 償いかたなければ、

ここにも「償いかたなければ」とある。

債主この二人を共に免せり。されば二人のうち債主を愛することいづれか多き』43 シモン答えて言う『われ思うに、多く免されたる者ならん』イエス言い給う『なんじの判断は当れり』44 斯て女の方に振り向きシモンに言い給う『この女を見るか。我なんじの家に入りしに、なんじは我に足の水を与えず、此の女は涙にて我が足を濡らし、頭髮にて拭えり。45 なんじは我に接吻せず、此の女は我が入りし時より、我が足に接吻して止まず。46 なんじは我が頭に油を抹らず、此の女は我が足に香油を抹れり。47 この故に我なんじに告ぐ、この女の多くの罪は赦されたり。その愛すること大なればなり。赦さるる事の少なき者は、その愛する事もまた少なし』

キリストはこのパリサイ的な角度の自己義認というものを責められ、そして、本当に悔い改めた一人のひとに、

48 遂に女に言い給う『なんじの罪は赦されたり』49 同席の者ども心の内に『罪



をも赦す此の人は誰なるか』と言い出づ。50ここにイエス女に言い給う『なんじの信仰、なんじを救えり、安らかに往け』(ルカ7・36〜50)

「償いかたなし」

ということはもちろん、他人^{ひと}ごとではありません。我々、自分の生涯ということを考え、なぜ、福音に私たちは来なければならなかったか。また、福音の世界から他に出ていくことができないか。ということは、いかに自分自身がこの「償いかたなき」者であるか。償いかたなき者を本当に無条件に、このマタイ伝の主人のように、悪しき家来を赦す。罪の赦しです。

罪の赦しは、もうひとつ別の言葉でいえば、「贖罪」といいます。贖罪の前に、キリストはまずそのように赦された。譬話をもって赦され、事実——ルカ伝の方は事実ですからね——そのような人を赦したもう。イエスはもちろん、イエスだけが罪を赦す実力をもっていらっしやる。

●自我という罪

私たち自身がこの「自我」という罪です。この「自我」という言葉が私たち日本人には一番ひびく。「利己心」という言葉もありますけれども、もうひとつ「自我」という言葉の方が深い言葉です。この自我というやつがいつも妨げになる。これが「罪」なんです。これが妨げにならないければ、その人は「義人」です。パウロが、

「義人なし、一人だになし」

と言ったが、本当に福音的な角度から、神の光に照らされて「義人」というひとは、イエス・キリストの他にいない。お釈迦さんも迷っていた。孔子も迷っていた。やっと七十歳になつて、

「七十にして心の欲する所に従つて矩^{のりこ}を躐^こえず」

なんて、せいぜいそういうところですよ。

イエスは人間の弱さをみなもっていらっしやつたが、完全にそれに打ち勝ちたもうた。

「己を憎まずば」

と言われたときに、キリストは己を憎んでいるひとだった。イエスの言葉はすべて告白ですから。己を憎んで神を愛する。これができないのが私たちのこの自我というやつです。問題中の問題は、人間というものの問題中の問題は、この自我である。もう東西古今の宗教、哲学の問題の中心は結局、自我にくる。

「この自我がいかにして征服されるか、突破されるか」

というところに問題がある。悟りの世界で「宇宙我」というものにくるか。

「贖罪の世界で本当にキリストと一つになり、やがて神の姿にまで化せられるか」という世界である。



今日は、私たちはやはり、旧き問題で常に新しき問題であるところの、この「罪」の問題、
「罪の決定的な解決は、また具体的にどういうことであろうか」

ということに、少しく立ち至りたいと思うわけです。いや実に、少しくではない。ある決定的なものを皆さんがそれぞれここでもつて受けとる。私自身がそれを受けとって、この山を下っていききたいと思うわけでありませう。

鉄は何回も溶鋳炉の中に入れられて、そして鍛え上げられていく。そして、日本刀という世界に冠たる名刀ができるようになる。福音の世界もやはり、そういう意味においては、もの凄い鍛え上げであります。神さまに、キリストに叩かれる。人間に、人にではない。さきほど、詩篇32篇を読んでいただきましたが、

「われ汝の前に」

という。人に何も告白することはない。カトリックのように、なにか懺悔僧に言ってどうのこうのというようなことは要らない。福音の世界は、ただ神の前に一人びとりが本当に告白していく。そして、真にキリストの赦しというものにあずかって進んでいく。

今のルカ伝に、またマタイ伝にもありましたように、この「赦し」ということです。償い方なしという。私たちがなにか自分の努力とか、あるいは自分の信仰を強めるとか、あるいは聖書をよく勉強するとか、なにかそういうったようなことで、多少でも償われるならば――それは多少は償われるかもしれませんが――けれども、それが決定的に償われるかという、そうはいかない。キリストの赦しというものがどれほど質のちがった赦しであるか。私たちは人を赦すことが、ある程度はできます。けれども、本当に人を赦すということは、手放しではできない。本当に赦すことのできる人は、自らが本当に義人である、神さまの前に本当に義なる者です。

●羊の我

新しい人もいらつしやるので、もう一遍申し上げておきますが、「義」という字は

「羊の我」

と書く。即ち、詩篇23篇のごとく牧者に従って歩いている羊のごとく、神の御意みこころに従順に、信頼をもって喜んで従っていく。即ち、「羊の我」となっているときに、初めてそれが「義」である。ただ正義という意味ではない。そういった「羊の我」となっている人が本当の「義人」で、これはキリストの他にいない。

「汝の御意がこの我を通して、我を貫いて、成ってください」ということ。傍観して言っているのではない。

「汝の御意をこの自己を貫いて、どうぞ、なしてください」

と、自分を完全に明け渡して、キリストによって貫かれています。貫かれたる人です。神の聖言みことばで貫かれたる人が即ち義人である。ところが、私たちは貫かれないで、なにかいつも



それに抵抗している。その自我というやつは、なかなか立派な自我もあるんですよ。サウロ（後のパウロ）なんていうのは立派な自我をもっている。人からみても実に立派なんです。マルチン・ルターが修道僧であったときも、彼は模範的修道僧です。みんなが見ると、あは素晴らしい見習い僧だ、欠点がないと言ってみんなが誉める。立派なんです。道徳的に立派な人がこの福音の中に、またなかなか入れないというのも、その消息です。パウロが、自分はユダヤ教のパリサイ人中のパリサイ人で、実践きゆうこう修行しているから、

「律法の義については責むべきところなし」

なんて、書簡の中で言っている。それくらい立派なんです。ところが、それは自己の意志をもつて立っているところの立派さであって、神さまの御意に従っている貫かれたる立派さとは違う。自分の方から貫いている。自我でもつて貫いている立派さです。ところが、「貫かれたるもの」と「貫いているもの」とは違うんです。

「精神一到何事か成らざらん」

というのは、私たちが小さいときから教わっている。それはひとつの偉大な真理です。大いに意志をもつて貫く。結構なことですよ。福音なんていうと、

「キリスト教なんていうものは、なにかすぐ信頼だの、罪の赦しだのといって、なにか男らしくないような意気地のないようなものだ」

と思つてしまつて、入つてこないわけです。

「とにかく、私は一生懸命にやるんだ」

と。それはそれで結構なんです、ある意味において。だけれども、それは人間の一生懸命であつて、人間の側の手放しの一生懸命ではしょうがない。

●キリストにおける熱心

そういう立派が実は、とんでもない間違いを、パウロの場合はしていた。間違いをしな場合もあるけれども。これは人殺しまでするくらい間違いをパウロはやつてしまった。ステパノの殺されるのを良しとしたような人ですから。自分の、神に対する熱心というのが、自分の側からの神に対する熱心というのが、これがユダヤ教的なパリサイ的な熱心です。

「神の熱心が我を貫く」

というのとは違うんだ、方向が。それは手前なんです。その熱心、真実は悪くはないけれども。キリストはそれを哀れんだ。

「この男は一生懸命でいきり立つて、熱心だけれども、とんでもない方向の間違いをやっている。しかし、こいつをなんとかひっくり返してやろう」

と。それで、復活のキリストがサウロ（パウロ）に現れて、

「サウロ、サウロ、なんぞ我を迫害するか！」



とききた。そして、サウロがひっくり返された。自己中心の熱心さは、どんなにそれが立派
 そうでありましても、それは一種の霊的傲慢なんです。道徳の世界の善さというものは、
 もうひとつ高い次元にくるといって、それは本当の善さではなかった。そういうことにく
 るわけですね。

そこで、パウロはその熱心さを、神の熱心に、キリストにおける熱心に切り替えさせら
 れたから、

「**今までの義なんていうものは塵芥ちりあくたの如く思う**」
 と言いだした。

「あれはとんでもない間違いをしていた」

と。このパウロというのは、ユダヤ的な熱心さの代表者ですよ、律法的に。それをひつ
 くり返すためにキリストは来たので、イエスが学者や祭司たちに嫌われるのはもう無理ない
 ですよ。正直、キリストは安息日なんかを破つたりなんかしたんだから。

● 無人無私

「本当の義はどういうことか」

ということですよ。旧約聖書において「義」(セデック)ということも言っている。

「お前たちは、義、義と言っているところの義の民なんだが、とんでもない義のま
 ちがいをしている」

と。預言者たちが多少、それに気がついてはいたけれども、その預言者たちが預言したとこ
 ろの、一番中心の焦点であるところのこの義を、キリストが自ら決定的にそこに現した。
 全く、絶対の対立ですよ、極限的な。その義人が即ち、

「**自分は何もできません。ちっとも善くはありません。私は善き者でもなけれ**

ば、何もできません」

と言う。「善き先生」と言われれば、

「**なぜ、私のことを善いと言うか**」

と。もういつもそうです。

「**何も言えません。何も教えません。何もできません**」

というのが、ヨハネ伝によく書いてある。キリストは即ち、「芥種一粒」になる前には、キ
 リストはゼロです。申し上げているとおり、無人、無き人である。この無というものは、
 禅宗的な無を言っているのではなくして、私無きという、無私です。

無私という、無ということを私たち東洋人は、特に日本人は深くつかまえて自覚し、これ
 をこの福音の世界で証しするひとつの使命をもっている私は思う。西洋人は非常に個性
 が強いですから、「人格」ということを言う。これは向こうの神学書を見れば必ず出てくる。
 私は決して人格を否定するのではない。霊的人格ということ是非常に大事なことです。そ



の人格を言う前にまずこの無の世界をしつかりつかまえないと、人格が本当の人格になつてこない。これは西洋人にはわからない。また一般の、私が育つた無教会でも、無なんて言つたつて、その無がどんなものでしょうかね。

完全に降参して、「もう償い方なし」という――

「少しは償える」

なんていうのではない――もうどうにもならんと。

「これだけはまあ、払え」

というようなことではなくて、

「もう、一つも払わなくていい」

ということ。無条件です。

● 空気は無条件

いつも私はこの「無条件」ですぐ言うのはこの空気のことです。空気は無条件的に私たちが吸っている。無条件に吸っている。無条件、無価値なものが無限の価値をもっていると申し上げる。空気がなかったら、私たちは一分と生きていられない。それくらいに私たちの生命というものはこの空気と密接不可離である。全く文字通りに密接不可離で、これに包まれ、これを吸い込んでいます。

「ははあ、空気と私とは一つであるなあ」

と。空無と我とは一つ。だから、それを瞑想するだけでも、素晴らしい世界です。空無というものは、何も無いようだが実は、これは充滿しているんです。充滿している。何も無いようだが、無がもう無限に充滿している。

だいいち、「無」という字が、

「二十と二十の四十の林が空の下にある」

というすがたであるという。「四十の林」は木がたくさんあるので、「無数の木」ということ。「無数の木」という字が「無」という字の本来の字なんです。シナ人は素晴らしいなと思う。無数の、数えられないということが無だという。

即ち、空無となること、何ももの残さずに空っぽになるということが、充滿ということになる。神さまが、キリストが与えてくださるところの「わが義」という、その義という内容が本当にそこに充滿してくるためには、この「無」となることです。

ところが、無となれないんです。無と本当になれたら、私は義人になりますよ。皆さんも一人びとりが本当にキリストのごとき義人になれます。ところが、この無になれないで、何かを、サムシングを残す。これが自我というやつです。無に瞬間的にはなつても、またそいつが出てくる。どうにもならん。償い方ない。この自我という負債は償い方なしだ。

「自我という負債が払えるなら、払ってごらん」



というわけです。

人間的な立派だの、人間的な人格だのと、何を言ってるか。人間的な真実だの、純粹だのと。だいぶ、私は乱暴なことを言うけれども、無教会では、

「真実だ、純粹だ」

とすぐ言う。そういう純粹とか、真実とかは、

「私たちはダメな偽り者であるが、キリストだけは真実だ」

とパウロが言っている。私たちにもし、その角度があるとするならば、

「ダメな者でいい」

ということの徹底的な認識だけです。これも徹底的な認識だけ。人と比較しているうちはダメです。

「でも、私の方があれよりもどうだこうだ」

と言っているうちはダメです。

それでは、地上でもってその素晴らしいところに来るかというところ、来ない。死に至るまで、ダメのカスなんです。

「それでは、福音は要らないではないか」

と。「決して然らず」です、パウロと同じに。どんなに私たちがガタガタであっても、虫食いだらけの花であつても、この本ものを受けとつていけば、それは必ず勝つていく。

● 十字架の赦し

それでは、本ものはどこで受けとるか。この絶対無条件の無というものを、即ち無我という、

「私にはもう自我がありません」

ということを、どこで受けとるか。あるくせに、ないとなぜ言えるか。私は自我があるくせに、自我がないと、どこで言えるか。それは一つのところで言える。それが十字架であります。

「十字架につけられ給いしキリストの他は、我は述べまじと心を定めたり」

と、パウロがコリント書簡で言った。

コリント教会はいろんな意味においてガタガタな教会です。非常にいいものもあるが、玉石混淆いんこうです。霊的な現象も現れているし、いろいろなことです。けれども、その福音の要は、何といつてもこの十字架である。十字架の受けとりが深められるところに、聖霊の受けとりがまた深められていく。絶対にこれは離すわけにいかない。他の霊はいくらでも、十字架がなくなつて、入ってきますよ。霊的な現象は起きます。いろいろな宗教はあるんだもの。いろんな宗教はみんな霊的な力をもっている。

けれども、福音における聖霊は、この十字架なしにはこない。十字架なしの手放しの霊なんていうものは、福音における聖霊ではない。キリストは、あの驚くべき実存が、弟子



たちに聖霊を本当につき込むことができなかつたんです。なさらなかつた。分かっている。

「お前たちを今、伝道につかわす。いろいろな病を癒したり、いろんな力ある業わざをさせる。悪鬼を追いだすこともさせる」

と。キリストは実際なされたですね、弟子たちを二人ずつ遣わした。けれども、それが決定的なものでないことは、キリストも知っていたらっしゃる。一応、その恵みの徴は現れるけれども、それは徴であつて、本当の恵みは自分が十字架されるまでは来ない。そして、十字架されて初めて、聖霊がお前たちの中に内住するまではダメだと。

そのことを一番よく表しているのがペテロであります。イエス・キリストを直々に目で見耳で聞き、手で触っていたこのシモン・ペテロ。あれはまるで波みたいな者で、非常に良いかと思うと、またガタンと落ちたりする。どうも、定まりなき存在でありました。とうとう終いに、三度キリストを呑いんでしまった。

「私はあれの弟子ではない」

と。それでも、キリストはその先を見ている。

「お前は、御霊を受けたら、今度は本当に私を愛することになる」

と。復活のキリストがペテロに

「私を本当に愛するかね」

と、三度まで聞いたことがヨハネ伝の終りの方に書いてある。それで、御霊を受けて立ち上がった使徒行伝のペテロであります。それは、キリストがこの罪の赦しの一番の肝心かなめの十字架という血のバプテスマを受けられてから、臨んでくるところの聖霊であります。

「罪の赦し」

ということを安易にただ思っているような赦しの受け方をしていたら、聖霊は入ってこない。私は本当に、この十字架のことを思っていたら、実はこんなことを言つて、おしゃべりなんかしていられませんよ。もう言うのがいやになつてしまう。黙りたくなる。

この十字架においてこそ初めて決定的な赦し、がくることを、まだここでは言つてらっしゃいませんけれども、それは十字架という——言葉なき言葉、それ自身が罪の赦しという驚くべき行為的な言葉——これをもつて、キリストは決定的なものを私たちにくださった。

その前段として、この「一万タラント」であろうが、百万タラントであろうが、全部赦す。もう数えられないタラントです。私たちの負債は「一万タラント」どころのさわぎではない。二百十億円どころのさわぎではない。これは数えられない。測られない。お金で、

「お前の罪はどれだけだ」

なんて、数えられない。私たちの罪はどうにもならない。

そういう徹底的な赦しは即ち、「七度を七十倍に」もして赦す。

「七度まで赦しましょうか」



「何を言っているか。何回でも赦してやれ」と。「何回でも赦す」ということは、「一回の赦しが徹底的である」ということです。

●共に十字架されたり

キリストの贖罪の一回の赦しは徹底的であるということは、ヘブル書に書いてある。ヘブル書 9 章 11 節に、

「然れどキリストは来らんとする善き事の大祭司として来り、手にて造らぬ此の世に属せぬ更に大なる全き幕屋を経て、¹²山羊と犢との血を用いず、己が血をもて只一たび至聖所に入りて、永遠の贖罪を終えたまえり。」(ヘブル 9: 11~12)

「永遠の贖罪を終えたまえり」とは素晴らしい言葉です。

「それでも、私はこうで」

なんて、いつまで言っているか。「それでも私は」ではない。いつまでたつても

「それでも私は」

だから、そういうものを徹底的に永遠に贖ったというのが、このキリストの十字架という贖いです。二千年前からこの世の末にいたるまで、地の極にいたるまで、これは常に霊的な力をもっている贖いであります。常に現在として私たちに臨んでいるところの、現在完了として臨んでくるところの、この贖いです。日々、現在完了的に私たちにこの贖いは臨んでいる。

十字架の前にもう一切の事なしに、本当に平伏す。本当に平伏すと、パウロと同じように、

「われキリストと共に十字架されたり」

ということになる。われキリストと共に十字架されたりと。この

「十字架されたり」

というこの貫きが、これが無なんです。無私なんです。私無き世界。無罪なんです。罪無き世界。無罪、無私というものが、この「十字架されたり」というところに来た。

そういうキリストは、私たち一人びとりを本当に喜びたもう。

「我れ汝を悦ぶ」

という声はここに響いてくる、この「十字架されたり」というところに。「我れ汝を悦ぶ」と言つて、「汝」と言つて呼ばれているものが、即ち

「私なき我」

が本当の人格の土台なんです。人格と言うならば、それが本当の個として立てたもうところの個なんです。決して、ボケないんです。悟りの世界で何か、ポーツと一つになつてし



まうなんて、そういうのではない。ハッキリとその個を個として立てたもう。そこに初めて、人格の土台がすえられてくる。しかし、人格の内容は何かということになる。そこに聖霊の問題がくる。

十字架されて聖霊のバプテスマを受けたときに、初めてその人は、本当に霊的人格としての土台が据えられる。それで立派になったんじゃないですよ。本当の土台が据えられる。相変わらず躓いたり転んだりするかもしれないけれども。しかしその人は、もはや誰が何と言おうとも、自分がどのように言われましようとも、そういうことにはもう恐れなく、神の恩寵、キリストの恩寵なるがゆえに、その証しとして、証人としてわがうちに形成したもうところの——本当の「人間形成」とはそのことです。人間創造ですよ、「形成」どころのさわぎではない——新しき創造をここに起こしたもうところの、このキリストにあつてまぎれもない「一粒」の存在となる。実にまぎれもない一個の存在となる。天下、一品となつてくる。一人びとりが天下一品となる。

ところで、そういった無条件的な赦しをこの譬話で受けながら、この絶対恩寵を受けながら、今度はその六十万分の一の「百デナリ」の借金のあるやつを捕まえて、首をしめて牢屋に入れた。これは絶対恩寵を受けとつてないからです。

「あの悪い家来は絶対恩寵を受けとつてないから」というわけです。ところが、私たち自身がこの絶対恩寵を受けとりながら、受けとつてないという情けない現実をしばしば繰り返している。この「悪しき家来」はまた私たちのまことに申しわけなき姿でもある。

「お前が願ったことによつて、負債をことごとく免したが、お前もまた、六十万分の一の借財をしたその同僚を憐れむべきではないか」と。キリストの憐れみというのは実力ある憐れみです。

●もし人を赦さなかったなら

35 もし汝等おのおの心より兄弟を赦さずば、我が天の父も亦なんじらに斯の

ごとく為し給うべし』

これは恐ろしい審判です。絶対恩寵にあずかりながら、人を赦すことができなかつたならば、これはもはや救いの余地がないという意味です。

「斯のごとく為し給うべし」

と、今度は永遠の牢屋に、地獄に入れられてしまう。我々はもし人を赦さなかつたならば、地獄に入れられる。キリストに赦されていながら、人を赦すことができなかつたら、これは地獄に入れられる。

猫は三年飼われて三日恩を忘れないが、あとは忘れてしまう。犬は三日飼われて三年恩を忘れないという。まあ、どこまでどうだか知りませんが、とにかく、キリストの



恩義、恩愛ということは桁違いな恩であります。これは私たちが永遠に身につけておきに恵みです。恩恵です。絶対恩寵、絶対恩恵、絶対恩義です。

この頃の世界は、権利義務だとか——それは権利義務の世界もありますよ——けれども、本当に恩義というような感謝の念というものが非常にうすくなってしまった。本当に畏るべきものを持たなくなってしまった。本当に感謝すべきものを持たなくなってしまった。今の日本の民主主義というものは非常に禍害わざわいなるかなです。

絶対恩寵をもって赦された僕であります。単なる身内じゃない。赤穂義士なんていうものは、主君に対するあの忠誠の念があのようなことであります。自分の身を棄てて本当に——仇討ちそのものが決して結構なことではありませんでしょうけれども——しかし、あそこに貫いているところの或る大事なものはやはり日本人の心をうっているはずですよ。

私たちはキリストのこのような主の愛を、主の恵みを受けた僕であります。パウロが

「我は主の僕」

と言ったのは、正にこの「主人と家来」ということ。それならば、悪しき家来のごとくならずして、無条件に赦された私たちも本当に兄弟姉妹たちをそのようにお互いに赦す。兄弟姉妹たちの関係にある私たちがお互いに本当に赦していく。

ところが、この赦しができなくて、

「やれ、誰がどうであるこうである」

と、すぐ人を審いたり批判したりする。この譬話は極限的であるが、決してそれが誇張でも何でもなく、我々がいかにキリストの罪の赦しを徹底的に受けているか。本当に罪の赦しを受けている人はいかなる人をも本当に赦す。赦すことができるんです。手放しでは赦すことのできない私たちは、

「敵をも愛せよ」

はできない。けれども、敵を愛するというようなこと、自分を怨むうらやつのために逆に祈ってやること、みなこれは担いの態勢です。担いの態勢をもって——「赦す」といっても、それはいばって赦すのではない。私がこのようにキリストに赦されたものです——祈りをもって、担いの態勢をもって、相手を赦す。これがもしできないならば、もうその人は救われない。

「天の父もまた汝らをかくの如くなし給うべし」

と。この絶対恩寵にあずかっていながら、赦すことができない。キリスト教界、宗教の世界では、それが実にいやらしくも現象している。だいいち、宗教戦争そのものがそういうことを現している。宗派争いがそれを現している。

「どこの教派はどうであるこうである」

と。よほどそのことに気がついて、この頃は大いに「和」ということを考えて、また実行に移しつつあるようですけれども。ただ人間的に計られても、それはダメです。問題は、



この赦しはどのようにしてできるかということです。

● 聖霊のバプテスマ

十字架の赦しを私たちが本当に受けとつて——ここにはキリストはそこまでは仰つておられませんけれども——その次にどうしても来るのは、さきほど言ったこの御霊です。聖霊のバプテスマです。聖霊のバプテスマを受けて、御霊が私たちの中に宿つてきたらば、これは本当に人を、敵を——もう敵も味方もありはしない——何びとといえども本当に、その時その時に、その事あるいはその所で、その人に対してもつとも適切な担いの態勢、祈りの態勢、愛の態勢というものがそこに出てくるわけです。これは御霊がなければ出てこない。

「愛」と言いますが、それは決して一つの表現ではない。ある時は、それは怒りに表れるときもありますよ。さまざまな表れ方をしますが、それは本当に相手を愛しているからです。その御霊の世界においてはじめて、私たちは本当の担いの態勢でもつて相手を赦す。担いの赦しです。キリストの十字架は担いからです。ただ言葉で赦しているのではない。自分がそれを引き受けてしまう。自分がそいつを背負つてしまつて、背負うことができる赦しが本当の実力ある赦しです。これは聖霊が来なければできませんよ、聖霊が来なければ。ステパノがそうです。散々誤解され迫害されて、悪口を言われて、石に打たれて血まみれになつて倒れながら、

「どうか、彼らに罪を負わせないください」

と。最初の殉教者ステパノのあの姿はパウロを打つたでしょう。打つたに相違ない。パウロもこれには参つたに相違ない。一番私たちの存在を根底からひっくり返し、悔改めに導くものは、この担いにおける赦しであります。

「彼らは為すところを知らず」

と。キリストは十字架上から担いの態勢をもつて発し給うたところの愛の祈りです。これははやせ我慢では出て来やしない。聖霊の実力が、神の愛の生命の實力が自分のうちに漲みなぎつて、「天界にキリストの立ち給うのを見る」と言つて、ステパノは輝かしい眼をもつて殉教しながら進んで行つた。火に焼かれながらなお讚美歌を歌つて逝つた殉教者たちが日本のカトリックの先輩にいます。

どう考えても、私たちの福音はこの御霊の事態にある。この十字架の赦しを本当に受ければ、十字架の赦しがくれば、即、御霊の世界に入る。そうなつたら、もう大丈夫です。あなた方一人びとりは自分たちの中に、いろいろな

「どうもしようがないな、これは」

というものをみんな持つていよう。しかし、「どうもしようがないな、これは」は、その世界から本当に突破できていく。自己との戦いはこの御霊の力をもつて進んでいく。



● 赦しと審判

「もし汝等おのおの心より兄弟を赦さずば、我が天の父も亦なんじらに斯のご

とく為し給うべし」

とキリストが言われる。この

「兄弟を赦さずば」

というのは

「隣人を赦さずば」

ということ です。隣人を、兄弟を――誰れ彼れということはない、どんな事態でもいい――本当にこれを赦さなければと。その赦しを、またもし、そちらが受けとらないならば、その人はみずから審判を招くだけのはなしです。赦さなければ、その人は審かれるでしょう。赦しを受けとらなければ、それも審かれる。赦しというものは恐ろしい内容をもっている。

キリストに絶対無条件に赦された私たちは、人を赦す義務が――義務と言ってはおかしいけれども――本当に人を赦さざるを得なくなってくるわけです。人を赦さざるを得ないということにならないならば、それは十字架を本当に受けとつてないからです。キリストも、神さまも、その時は

「それはどうにもならないよ」

と言う。十字架の赦しすらも――一つの例外ではないけれども、例外的な結果をもたらすものは何かというところ――赦しを受けとりながら人を赦さないならば、それはもはや十字架も効力をもたないというようなことになる、という恐ろしきをもっている。

「恩寵の蔭に審判あり。審判の奥に恩寵あり」

というような世界です。その赦しをなお受けとらないで、

「でも、私は。あいつは」

なんて言っちゃってやっていると、この赦しを受けとらないでこだわっていたらば、その赦された人は神さまの審きを受ける。仕方がない。そういうようなわけですよ。これが本当に霊的な法則の世界です。厳かな御霊の法則が――

「御霊の法」

とパウロが言った――この法則というものはそのようにして働いている。

でありますので、なるほど、このキリストの極限の御言というものが何と素晴らしい、私たちの現実をえぐっているところの事態であるか。そして、それは本当に私たちにこの恩寵の厳かさ、またそれを受けた後の実力の素晴らしき豊かさというものを約束してくださっているか。そういう意味におきまして、この無限大の赦しはイエス・キリストの十字架の――「十字架、十字架」ということは、あまり口で言いたくないが――それほどの深い内容であります。

皆さん、もう問題は何もありませんね。私たちがいろいろな問題をもっている。しかし、



それは少し煮詰めてその奥を考えると、自我というやつがある。それが十字架ですつ飛ばされると、

「はい。いいです。いろいろな問題は結構でございます。課題は結構でございます。いまだ解決されざるに既に解決している。未だ果たされざるに既に果たされていく」

という、奥の世界を受けとつていく。そうであるがゆえに、いよいよこれを解決していくことができる、果たしていくことができる、という実力がその背後から現れてくる。どんなことがあつても、どんなに誤解され迫害され、どうであつても、或はひどい仕打ちをうけても、なお相手を赦して担つていく。その人はキリストの姿にどしどし変えられていく。キリストはそのような人の中にいよいよ内在し給う。福音は、そこに神の国が本当に建てられている。数ではない。本当に絶対に質の世界です。

「私たちは、ただそれをいつも本ものとして展開していこう、内住させていこう」ということです。私たちはいろんな事態にぶつかって鍛えられれば鍛えられるほど、その担いの力を与えられていく。そうして、

「この素晴らしい福音の世界に、何とかして人を救つてやろう」

と。苦しんでいる人、悲しんでいる人、痛んでいる人に――それが病のことであろうと、何のことであろうといい――いかなる事態に対しても本当の解決を、実力ある解決を相手に与えていく。それをしないではいけないという、そういうキリスト者であらざるを得ないんです、この福音の世界になったら。その中に本当に身が入ってきたら。本当の伝道とはそのようにして一人、二人、三人と展開していくことです。

それが本当に成つていかなければ――結果はどうでもいいですよ。けれども、その事態を本当に生活において動いていかなければ――このキリストの赦しと、キリストの赦しの後から来るところのこの御霊の実力を受けとらないということの反証になるよりか仕方がない。

●担いの赦しの愛

私たちは、しかし、現実の問題として、いかに人を赦すことの少なきか。すぐ、「何のかん」と下らないことを思う者であるか。

「そんなものは棄ててしまえ」

と言って、自分を乗り越えていかなくはいかん。そのときにはもう、平和とか何とかいう言葉もまだ、まだるっこい。お互いの中に本当に熱い生命が貫流いたします。「よし」ということです。だからもう、どういう人でありましても、本当に胸襟を開いて、八方破れの姿でこれに対することができるといふのは、このキリストの赦しを身に受けているからです。担いの赦しです。この担いの赦しをもつて、実力をキリストにいただきながら――



―キリストが貫いているんです―キリストの担いの赦しで貫かれた者が、また担いの赦しをもって貫き赦すのです。この

「貫き赦す」

というような事態が私たちの中にある。もう何とも言えないうれしい世界です。

皆さん、「交わり」と言うけれども、

「どうも、あの人たちとまだ交わりにくい」

なんて、何を言っているか。どうか、どなたでも、大いに胸襟を開いて、本当に交わってくださいよ。それができないなら、何かひっかかりがある。自我がひっかかっている。

「類は友を呼ぶ」

なんてやっていたらダメです。みんなこれは「類」です。キリストの赦しにあずかって、もう徹底的になっっているなら、みなこれは本当の同類ですよ。同類であるが、同形ではない。型はちがう。みんなそれぞれの型をもっている。皆さんはいろんな人間の型だの、質だのをもっている。けれども、この御霊だけがこれを全部貫く。そういうものが御霊でありまして、その他のものでも、それ以下のものでもない。何かそこに隔てをしているなら、それはまだ本当に御霊の世界ではない。キリストの担いの赦しの愛というものはそのようなものであることを、私たちはいよいよ集会ごとに、いや、日常の生活で、どういう人によつたつても、

「ははあ」

と知らしめられていく。

昔の日本の偉大な坊さんたちは、仏さんの世界でそういう世界に入っていた。だから、昔の坊さんは偉かった。私たちは福音を受けながら、質的に―器はどんなに小さくても―質的には、法然、親鸞にも決して劣らないところの、皆さん一人ひとりであるのです。キリストを受けとつていけば、その質はそれ以上の次元の高いものが皆さんの中にいくらかでも臨んでいる。そういう意味で、福音を本当に受けとった日本人というのは何と素晴らしいものだろうか、ということになる。これが本当の勝利です。担いの赦しをもって行くのが本当の勝利です。では、おしまい。

